

遅すぎた覚醒

——“Death of a Traveling Salesman” 試論——

井崎 浩*

A Sudden Awakening in Eudora Welty's “Death of a Traveling Salesman”

Hiroshi IZAKI

Synopsis

The whole story of Eudora Welty's “Death of a Traveling Salesman” can be interpreted as a dream or vision that the main character, R. J. Bowman, has at his deathbed. In other words, Bowman is unconsciously verifying his whole life when he faces his impending death. But he can't realize his failure and dies as a salesman who loses his humanity, rather than as a true human being. Through his dream or vision, Welty gives us modern men and women an admonition.

I

“Death of a Traveling Salesman”は1936年に発表された Eudora Welty¹ のデビュー作であるが、深層心理学やギリシャ神話などを巧みに活用したすばらしい出来栄のものとなっている。まずストーリーをかいつまんで述べておきたい。

ミシシッピー州で14年間靴の行商をしていた旅セールスマンの R. J. Bowman は、インフルエンザにかかって長い間臥せっていたが、ある冬の日ようやく仕事を再開する。当面の目的地は Beulah という町だったのだが、途中で道に迷い、ついには行き止まりの崖から車をずり落としてしまう。病み上がりのため疲れ果ててしまい、心臓の具合もおかしかったのでふと目についた粗末な作りの一軒家に助けを求めに行く。そこには年老いた女がひとりいて、まもなく息子と思われる Sonny という屈強な男が戻って来て車を引き上げてくれることになる。ボウマンは体が弱っているので一晩泊めてほしいと頼み、二人から承諾される。やがて日が暮れ寒くなるとサニーはわざわざ遠くの Redmond の農場から火をもらってくる。そしてその後の食事中、突然ボウマンはサニーの母とば

かり思っていた女性が実はまだ若い女でサニーの妻なのだと知る。しかも彼女は身重だったのだ。ボウマンはこの二人の満ち足りた実り豊かな生活に気づくと、それに比べて自分の今までの生きざまがあまりにも惨めに感じられショックを受ける。その晩ボウマンは衝動的にその家を出、車のところへ走っていくが、そこで心臓発作を起こし孤独のうちに息絶えてしまう。

以上のような粗筋ではそれほど感じられないかもしれないが、この作品を一読した際の印象は何やら「夢のような出来事という感じではないだろうか。ほとんどの批評家もこの作品を評する際、必ずといってよいほど“queer”だとか“dreamlike”といった表現を用いている。そういえば全体の雰囲気もさることながら、細部を眺めてみても、まるで夢の中の出来事のような奇妙さが付きまとっている。

例えば車を進めているのに「後ろへ、ずっと後ろへ戻っていつている」ような感じや、崖の前で全力でブレーキをかけたにもかかわらず、なぜかブレーキは全く効かないといった事態は、我々がよく夢の中で出くわすことではないだろうか。さらにサニー夫婦のマッチの使用も拒否するという非常にプリミティブな生活の仕方や、サ

* 教養部

平成9年9月29日受理

ニーの神話のアーキタイプのような活躍、またサニーの妻の年齢をボウマンが20〜30歳も取り違えてしまうなど、いかにボウマンが病み上がりで知覚力が鈍っているとはいえ、少々説明がつきにくいことが多いには思えないだろう。

そこで次のように考えてみたい。すなわち、この物語で展開されている事柄はすべてボウマンの幻想ないしは夢の中の出来事だったのではないかと。それも実はボウマンは病気から回復したのではなく、病がこうじて心臓を弱らせ、現在死の床にあってこの夢をみているのではないかと。

そう考えてみれば、“Inside, the darkness of the house touched him like a professional hand, the doctor’s.”² といった描写などはひょっとするとそのことを匂わせているのではないかとも思える。死を目前に控えた病人であれば、当然医師の手当を受けているわけで、病床で夢を見ているボウマンの意識にそのことが反映してこうした描写が現れているのだともいえよう。

ほとんどの批評家はこうした見解を持ってはいないものの、少数の批評家、例えばMark Schorerはこの物語のすべての出来事は幻覚であり、病院のベッドに横たわっているボウマンの心の中で起こったことかもしれないとほのめかしている。³ あながち突飛な発想というわけではないようだ。

そこで本小論では、“Death of a Traveling Salesman”を中心人物のボウマンが死の床にあって見ている夢あるいは幻覚であると捉え、この夢をボウマンの精神が死という終焉を迎えるに当たって自己のこれまでの生の検証を行っているものだという観点から分析してみることしたい。

II

上記の視点で考察すると、冒頭のボウマンの旅は非常に象徴的な意味で捉えることができるように思われる。つまりこの旅は彼のこれまでの人生を総括するものであり、かつ行き止まりまでいってしまうことで彼の人生の終わり、すなわち死の時が迫っていることが暗示されているように。

彼の車は荒涼とした丘陵地帯を走っているのだが、特徴的なのは、見渡す限り家一軒なく、近くには人ひとりいないことである。家庭というものを持たず、近い人もなかった彼の人生の荒涼たる様と符合する景色となっている。人間は見えても、みなはるか遠くにいて、まるで

で「棒や雑草」のようにしかみえない。彼はセールスマンとして、人を顧客としてしか見ることがなく、言い換えれば、他人を現実的な人間としてではなく、商業的利益をあげるためだけの対象、つまり「棒や雑草」と大して変わらないものとして、心理的には大きな距離を置いて遠くから眺めていたのだ。現実接触を持った女性たちについてでさえ、“Women? He could only remember little rooms within little rooms, like a nest of Chinese paper boxes, and if he thought of one woman he saw the worn loneliness that the furniture of that room seemed built of.”⁴ のような述懐にとどまるのである。相手の人格や個性など一切尊重することのなかったボウマンの態度が、このラッキョウの皮むきのような画一的な回想によく表れているし、交渉のあったある女性のことを考えたときでも、ただ荒涼とした寒々しい孤独感が浮かばず、その女性と何ら人間的なコミュニケーションの存在しなかったことが窺える。このような人間関係しか築いて来なかった彼だからこそ、今、旅の途中にあってかすかに見える人々の視線はただ「壁」としてしか、それも「とても入り込めない壁」としてしか意識されないであろう。

このように冒頭部分の描写はボウマンの心象風景とでも呼ぶべきものであり、自分の過去の生き方を総括するものとなっている。そのために車は前へと前進しているのに、「まるで、後ろへ、ずっと後ろへと戻っている」ようにボウマンには感じられるのだ。つまりこの旅は過去へと溯って自分の過去を検証するものとなっているのだ。

しかしボウマンもさすがにこうした孤独で不毛な生しか築いて来なかったことに不安を感じずにはいられない。彼は自分の仕事上の業績や記録の価値に疑いをすでに持ち始めていたのだ。それまではセールスマンとしての実績に自信を持っていたのであろう。ホテルの鏡に映る自分を闘牛士になぞらえたりしてナルシスティックなところを見せるのだが、そうした誇りを感じるボウマンの生き方とは、何か大切なものが欠落した歪んだものにしか過ぎないのだ。そういえば彼を映した鏡が「いびつな(“wavy”)」とわざわざ記してあるのも象徴的だ。

自分の生き方の誤りにボウマンも死を前にしようやく気づきつつあるものの、例えば、“Why did he not admit he was simply lost and had been for miles?”⁵ と自問しているように、ボウマンはそのことをはっきりとは認めようとしない。いや、正確にはできないのだといってよい。自己の生を全否定せざるをえないような事態

に直面するのを彼は避けようとしているのだ。だから、彼はここで引き返すこともなく、道に迷ったまま先へ先へと進んでいこうとするのだ。

さらに、彼が祖母と祖母の部屋にあったふかふかした大きな羽布団の思い出に執着しているのも注目に値する。多くの批評家も指摘しているように、これは彼のフロイト的な「子宮回帰」の願望を匂わせるものだといつてよいだろう。つまり彼は、自己の生の有り様に責任を持って対峙することができず、子宮の中を思わせる祖母の部屋の羽布団という自分を庇護してくれる場所、何ら責任を負う必要のない思い出へと逃避しているのだ。

初めにも述べたが、彼はこの旅でビューラという土地を目指している。これはミシシッピー州に実在する町だが、ウェルティは後に、この地名は Beulah land を意識して付けたといっている。Beulah land はパニヤンの『天路歷程』やブレイクの詩、そしてもちろん旧約聖書に出てくるもので、“heaven” (天) と同一視されることもある。例えば、ブレイクでは「地の母」を表す。いずれにせよ、この作品でもビューラ (聖書ではベウラ) は「安息の地」のイメージと結び付けられているものと思われる。ボウマンもそこに着いたら「床についてぐっすり眠り、疲れをいやしたい」と考えており、彼の意識の中でも安息と結び付いていることがわかる。しかしどうやらボウマンの求めている安息や安らぎとは、祖母の部屋の羽布団に象徴される退行的なものであるようだ。John. F. Vickery はブレイク神話の観点からこの作品を分析した論文の中で、“... in Milton Blake says Beulah appears to its inhabitants 'as the beloved infant in his mother's bosom'” と述べてこの作品との関連づけを行おうとしているが、⁶ ボウマンの場合、こうした地母神的な力強いイメージではない。崖をずり落ち、ブドウの巨木の中を落下する自分の車を見ながらボウマンは「暗い揺り籠の中の子供」のようだと、自己の願望を投影するのだが、その子供には“grotesque” という形容詞が冠せられており、成長した大人としての自己の人生に向き合うことのできないボウマンの姿と重ねられている。

こうしてボウマンは道の行き止まり (先述のように彼の死のときを意味している) までやって来る。そこで彼は一軒の家を見つける。その家には女性がひとりいたのだが、ボウマンはその女性を「一目で」、「機械的に」年をとっていると判断してしまう。明らかに彼は、先程から指摘しているような、祖母の記憶と結び付いた子宮回帰の願望を彼女に投影している。いわば彼は死の直前にあ

って、夢の中で祖母のもとへ戻ろうとしているのだ。だから、先程の揺り籠の中の子供のイメージに引き続き、まるで「子供のように」いそいそとその家へ向かい、あたかも子供が祖母に訴えるかのように自分の窮状を伝え、家の中の、まるで子宮内部のような「暗さ」につつまれて「安心感」と「希望」を感じるのだ。そしてさらに象徴的にも彼はそこで再び、その部屋にあった掛け布団 (羽布団とのアナロジー) と結び付ける形で祖母を引き合いに出す。こうして彼は幻想の中で、彼の望んだ安息の場を作り出している。自分の人生に向き合うことも、死に直面することもない場を、である。

しかし、物語はここで終わりはしない。彼の無意識の中の何かが反抗するかのように、彼の幻想は違った局面へと動いていく。

まず、彼はこの家の中に、まるで子宮の中のような涼しさ＝心地よさを求めていたのに、そこは「寒く」、彼は次第に「神秘的」で「冷たい」「危険」を感じ始める。またサニーの雇い主 Redmond の名を聞いて奇妙な不快感を感じる。Redmond すなわち赤い月には死や災いと思わせるイメージがあり、それがボウマンを不安にさせるものと思われる。いずれにせよ、彼が求めた子宮内の安息とは異なったものがこの家の中に現れて来たのだ。

やがてサニーが戻ってボウマンの車の引き上げ作業を始める。そのサニーをただ満足そうな表情を浮かべて待っている女を見ているとき、ボウマンは突然奇妙な感情に打たれる。彼は何か不思議なもの、いつも彼から逃れ去ってしまうように思えたものを伝えたいと思い、彼女を抱擁したいという強い衝動を感じる。

I found out... how lonely I am. Is it too late? My heart puts up a struggle inside me, and you may have heard it, protesting against emptiness... It should be full, ... thinking of his heart now a deep lake, it should be holding love like other hearts. It should be flooded with love.⁷

このようなことを彼女に語りたいとボウマンは強く感じる。ここに語られているのが「愛」であることはいうまでもないが、ボウマンがその人生において無視し打ち捨てていた、そして心の奥底に沈め抑圧してしまっていた「愛」という感情が、死を目前にしたこの一瞬、直後の描写にもあるごとく、まさに渦巻き高く昇っていく川の水のように溢れ出して来たのだといえるだろう。しかしこ

の覚醒は、まさに瞬間的に消え去ってしまう。彼は翌日は旅に戻ろうと考えることでいともあっさりと自分の心の奥底から湧き出た感情を抑圧してしまうのだ。そのときの彼の考え方は非常に暗示的なものである。

This time tomorrow he would be somewhere on a good graveled road, driving his car past things that happen to people, quicker than their happening.⁸

こうした考え方には、これまでの彼の生きていくうえで姿勢が如実に表れている。つまり、人々のうえに起こっている事件、すなわち直前に彼が感じた愛情とか人々の愛だのコミュニケーションといったものを背後に残し、まるで逃げるかのように旅を続けていくという態度だ。Barbara Fialkowski がいうように、ボウマンにとって旅をするとは、人間性を無視するための手段のようなものなのだ。⁹

しかしボウマンにはもう一度だけ決定的な覚醒が訪れる。サニーはボウマンの車を引き上げた後、ボウマンのマッチを拒否して火種を取りにレッドモントの農場へでかける。このサニーの名については、fire-bringer として設定したものと次のようにウェルティは述べている。

I had got sensitive to the importance of proper names, and this change ["Rafe" in the first edition to "Sonny"] is justified: "Sonny" is omnipresent in boy's names in Mississippi and is not dropped just because boys grew up and marry; "Sonny" helped make the relationship of the man and woman one that Bowman could mistake at the beginning; and at the same time it harked back to the fire-bringer.¹⁰

多くの批評家が彼を sun-god と名付けるごとく、彼はボウマンのもとに「火」と「光」とをもたらす。「火」は霊的覚醒をもたらす意味を持ち、「光」はボウマンの真の姿を照らし出すのである。そうした象徴的な含みどおり、サニーのもたらした火は部屋の中に光を投げかけ、部屋中を「何かの花のように黄金色」に輝かせ、ボウマンの覚醒を準備する。暗闇の中にあっては、祖母のイメージと結び付けることできたサニーの妻の真の姿にボウマンは衝撃とともに気づかねばならない。そしてしかも彼女が身ごもっていることまで知らされるのだ。

He was shocked with knowing what was really in this house. A marriage, a fruitful marriage. That simple thing. Anyone could have had that. ... There was nothing remote or mysterious here-only something private. The only secret was the ancient communication between two people. ... [It] was suddenly too clear and too enormous within him to response....¹¹

ボウマンはサニー夫婦の実り多い生の有り様を目の当たりにして、それまで明確には決して認めようとはしなかった自己の生の不毛さ、空虚さを突き付けられる。しかもその大きな落差を生んでいるのは、先述したように、彼が無視し軽視し、ただ背後に置き去りにして進んで来た、あの、人々のうえに起こる事柄、単に個人的な愛情やひそやかなコミュニケーションであったのだ。彼が求めていた経済上の成功やそこから得られる利益といったものとは全く異なり、しかも全く取るに足らぬと思っていたに過ぎないものだったのだ。しかもそうした取るに足らぬと思いついて無視していたことが、今ボウマンにはあまりにも“clear”で“enormous”なものとして認識されたのだ。

ここにきてようやく彼は自己の生の有り様がいかにも誤ったものであったかを悟る。祖母と結び付いた退行的な安息の幻影も消え、彼は今、一人の人間として自分の生を責任を持って総括してこの世を去ることができるに至ったのである。

しかしこの認識は彼にとってあまりにも厳しいものであり過ぎたのだろうか。ボウマンはついに自分の生に決着をつけることができずに終わってしまう。先程彼に啓示をもたらした火が消え、暗闇が再び訪れるとともに、彼はまたそこで得た認識を後に残して旅に出ようとするのだ。人間的な事柄を、つまり人間性からまた逃げようとするのだ。彼は「自分が前にいたところまで戻らなければならない」と考えているが、この「前にいたところ」が何を意味するかはいくまでもない。「あの赤ん坊が自分だったら」と願って弱々しく生への執着を示すだけで彼はこの家を出る。しかし、まるで「死の世界へ旅立つ船」のように見える車まで行き着かずには彼は孤独のうちに死を迎える。

彼がこの作品で最後に口にする言葉は非常に暗示的だ。火が消えてしまった直後のことだ。彼は無意識に「一月には、すべての履物の大特売があります。」と繰り返して

いる。この言葉はサニーの家に入った直後に口にする「僕は、婦人服の安いのをいろいろ揃えて持っています。」という言葉と呼応している。つまり彼はこの家に入る前と後では何も変わっていないのだ。あれほど衝撃的な認識が訪れたにもかかわらず、彼は結局何も得ることはできずに終わったのだといえるだろう。サニーに対しても、何度も自分の価値観に従って金のことを口にしたボウマンであったが、最後にこの家を出るときにも、彼の至上の価値である金をこれみよがしに置いていくのである。Carol Porter Smith がいうように、ボウマンは人間としてではなく、人間性を失ったセールスマンとして死んでいくのだ。¹²

III

では最後に、冒頭に述べたように、この作品の出来事を死の床にあるボウマンの夢の中のことであると考えた場合に、ボウマンがサニーの家の中に入ってからの部分をどう捉えられるかを検討してみたい。

サニーは明らかにボウマンとは全く対照的な人物として描かれている。次の表は二人の相違点をごく大ざっぱに比べたものである。

	ボウマン	サニー
生活形態	旅	定住
生活様式	文明的(車, ホテル)	原始的
経済状態	一応の成功	極貧
健康状態	衰弱	頑健
結び付きイメージ	暗闇	火, 光
価値観	経済的成功	愛情, 人間性

このように二元的といえるまでに画然とした二人の差異をみると、サニーとは実はボウマンが長年抑圧してきた彼の人間性とか打ち捨ててきた生の可能性、つまりボウマンが至上の価値として選択したものの背後に押しやられたもう一人のボウマンとでもいうべき存在が、彼の幻想の中で人間の姿として具現したものであるとも思えてくる。死を目前にした彼の存在の深み、つまり無意識の深みの中から、最後の徒花のように萌え出て来たものなのではないかと思えるのだ。

先に引用した文の中で、ボウマンがサニー夫婦の実り豊かな生活を思い、「だれだって(“anyone”)そういう生活は持てるものなのだ」といっていたが、その“anyone”にはもちろんボウマンも含まれていたはずだ。だとすれ

ばボウマンも自分の選択次第ではこうした豊かな生活を歩めたはずだ。そうしたボウマンが自己の全可能性の中で捨象してしまったものこそが、末期を迎えんとしているボウマンの夢の中にサニーの姿をとって現れているのだ。

冒頭にあげた Marc Schorer と同じく, “... an atmosphere so dreamlike as to suggest the whole chain of events is imagined by the main character, ...”¹³ と述べている Charles Crawford Nash もサニー夫婦のことを、ボウマンの熱に浮かされた状態が生み出した存在であるかもしれないとし、次のように記している。

... their being perhaps only a product of Bowman's feverish brain, Sonny and his wife do in fact provide the moral norm of human communion and contentment against which we measure Bowman's empty and lonely wandering.¹⁴

以上のように、ボウマンの無意識から発した彼の人生の検証を眺めてきたわけだが、こうしたボウマンの姿とは、概して現代人の多くが陥っている状況のメタファーであるといえる。経済的なものを至上の価値とし、人間相互のコミュニケーションを軽視し、次第に人間性を喪失する姿は、現代に生きる人間の有り様とストレートにつながるものだ。それゆえ、Zelma Turner Howard はボウマンのことを「現代に生きるすべての人間の代表だ」とまで述べているのではないだろうか。¹⁵

この作品は1936年に雑誌に発表されたものだが、現在読んでも新鮮なみずみずしい詩情豊かな描写がされており、また非常に現代的なテーマを扱ったものであるといえよう。だからこそ、今でも魅力を失わない作品となっているのだ。

Notes

1. 固有名詞については基本的に初出のみ英語で記す。
2. Eudora Welty, “Death of a Traveling Salesman, *A Curtain of Green* (New York: Doubleday Publishing Co., 1941), p. 237.
3. Ruth M. Vande Kieft, *Eudora Welty* (New Haven: Twayne Publishers, Inc., 1962), p. 81.
4. Welty, p. 232.
5. Welty, p. 233.
6. John B. Vickery, “William Blake and Eudora

- Welty's 'Death of a Traveling Salesman,'" *Modern Language Notes*, LXXVI (November, 1961), 627.
 7. Welty, p. 241.
 8. Welty, p. 242.
 9. Barbara Fialkowski, "Psychic Distances in A Curtain of Green: Artistic Successes and Personal Failures," in *A Still Moment: Essays on the Art of Eudora Welty* ed. by John F. Desmond. (Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press Inc., 1978), pp. 65-66.
 10. Charles T. Bunting, "'The Interior World': An Interview with Eudora Welty," *Southern Review*, VIII (Autumn, 1972), 723.
 11. Welty, p. 248.
 12. Charles Crawford Nash, *The Theme of Human Isolation in the Works of Eudora Welty*, Diss. Minnesota 1975 (Ann Arbor, Michigan: University Microfilms International, 1984), p. 9.
 13. *Ibid.*, p. 15.
 14. Zelma Turner Howard, *Meaning Through Rhetoric* (Ann Arbor, Michigan: University Microfilms International, 1984), p. 175.
 15. 参考として、ユング心理学の観点からこの小説を考察した St. George Tucker Arnold, Jr. の見解をあげておく。
- St. George Tucker Arnold, Jr., *Consciousness and the Unconsciousness in the Fictions of Eudora Welty*, Diss. Stanford 1975 (Ann Arbor, Michigan: University Microfilms International, 1984)
- We feel in Bowman the tension between a much -too- late recognition of his need to respond to the unconscious contents of his psyche and the insurmountable difficulties of making such a response. (57)
- The instinctive, unconscious part of his psyche, long repressed, is longing for a release into the primal basis of its being, and in his physically weakened state, it overpowers his conscious resistance. (57-58)
- The husband's image suggests with tragic irony the life of psychic fulfillment that Bowman, by his solipsism, has failed to achieve. Sonny is a more positive, fulfilled anti-self to Bowman. (58)
- The ironic comparison of Bowman and Sonny is stressed through the resemblance of their wide-rimmed black hats, . . . (58)